

# 高度経済成長期における社会変動とむら社会

——明石市「大蔵谷」の事例から

三田 牧

MITA Maki

神戸学院大学人文学部

**要旨** 本研究では、明石市「大蔵谷」の稲爪神社をめぐるむら社会の活動の変遷を記述する。第二次世界大戦終戦から1980年代における日本の社会変動に、この社会がどのように適応していったかを分析することを通して、むら社会の現代的在り方を浮き彫りにすることを目的とする。

稲爪神社の秋祭りは、4つの地縁の組が中心になって担ってきた。高度経済成長期には外部社会に働きに出る人が増え、祭りの担い手が不足し、むら社会は存続の危機に瀕した。その時、組の枠を超えた協力による神事・奉納芸の継承がみられた他、青年団、ヤング大蔵といった社会集団が作られた。これらは、地域のために協同し、それによって絆を深めるという、昔ながらのむら社会の性質を有していた。また、人手確保のため試行錯誤した結果、組が地縁をベースとした結社縁のつながりへと変容し、むら社会が開かれていった。このように、「大蔵谷」ではむら社会の危機を、むら社会のやり方で切り抜けてきた。

現代の「大蔵谷」では、稲爪神社をめぐる活動によって、むら社会が実体をもって現れてくる。むらはもはや自明の存在ではないが、人々の実践によって形作られ、その中心には神がいるのである。

**キーワード** 明石市大蔵谷、稲爪神社、むら社会、社会集団、高度経済成長期

## 1 はじめに

### 1-1 問題

地域社会には、その社会が経験した出来事の記憶が層となっている。本来、どの社会も固有の経験を持ち、その土地「らしさ」を有しているはずだが、開発によってどこでも似たような風景が作られている今日、その独自性は見えにくくなってきている。

しかし今日も、町の真ん中に、小さなまとまりのある空間を見出すことがある。そこには神社や寺があり、その周辺の家々は、何らかのつながりを維持し続けている。それは「むら」という社会集団の名残である。むらは、人々が実質的に生活を共にする共同体のことで、むらと仮名表記するのは、明治の町村制によってつくられた行政区分としての村と区別するためである<sup>1)</sup>。

米山俊直は、「行政区画としての村ではなく、より具体的な、より小さい生活の場として、実際に存在している小地域社会」[米山 1967年：34頁]を、むらと呼んでいる。米山によるとそれは、村落共同体とか、部落とか呼ばれてきたものであり、明治22年(1889年)に町村制が

施行されるまでは、それが行政的単位である場合が多かった。むらにおいて人々は、血縁と地縁によって結び付けられ、むらはその人の人生を方向付ける枠組みであった〔米山 1967 年〕。「むらはつい最近まで、多くの日本人にとってかけがえのない、それを離れては生きてゆけない生活の場であった」〔米山 1967 年：38 頁〕という。

鳥越皓之は、例えば 20～30 軒の家々がひとかたまりになっているという景観的な側面から村を見た場合を「集落」と呼び、それらの家々が組織化されている場合、それを「村落」と呼んでいる〔鳥越 1993 年〕。鳥越によると、村落は一個の組織体であり、一定程度の自立性を備えている。理念的には、村落は、「集落を形成した人たちが自然発生的に、すなわち生活の必要から、みずからがつくってきた組織である」〔鳥越 1993 年：71 頁〕。江戸時代には、この村落にあわせて藩制村がかぶせられたと考えられ、村落と藩制村は重なることが多かったという〔鳥越 1993 年〕。

明治維新によって近代国家が構築されていく過程で、むら社会（あるいは村落社会）は徐々に形を変えていった。人々が自ら職業を選び、むらを離れることも可能になった。また、教育によって国民意識を持つようになった人々にとって、世界は自分の生まれたむらで完結するものではなくなった。第二次世界大戦の終結後、むら社会はさらなる変容を迫られた。民主主義思想の導入により、家やむらは封建制の残存ととらえられ、乗り越えるべきものとされた。また、日本が産業社会に転換していく過程で、多くの人々が都市に移住し、むらの空洞化が進んだ。家やむらにとられない個人の自由が、追い求めるべき価値となった。

その反面、「自由な個人」であることの孤独や困難さも意識されるようになっていった。高度経済成長期に入った 1960 年代～1970 年代頃から、コミュニティー活動が盛んになり、人々とのつながりが求められたのはその表れだろう。そのような世相を反映し、人類学や社会学においては、血縁や地縁ではなく、社縁に注目が集まった。社縁とは、結社縁のことで、何らかの目的が機縁になって作られたつながりである〔米山 1966 年〕。例えばサークルや組合、学会などもそれにあたる。社縁は、ジャーナリズムなどの世界では「会社の縁」という意味でとらえられることも多くあった〔中牧 2003 年〕。職場を含む様々なコミュニティー（社縁）への注目は、地域社会とは別のところで人々が群れる現象が多く見られたことの反映である。さらに、縛られるのではなく個人が選び合う縁という意味の選択縁〔上野・電通ネットワーク研究会 1988 年、上野 1994 年〕という言葉も生まれた。そして社会が個人主義化することによるひずみが生じている今日では、一度は封建的と否定された地域社会がもつ力を見直す動きもおきている〔cf. 内山 2010 年〕。

このような社会的関心や価値観の変遷をふまえつつ、本研究では、日本社会の変化をむら社会がいかに受け止め、適応していったかに着目する。本研究でとりあげるのは、明石市大蔵本町にある稲爪神社をめぐるむら社会の活動である。稲爪神社は明石の中心街から徒歩圏内にあり、その周辺は山陽道沿いの歴史的景観をとどめている。一見、時代に取り残されているかのようなこの地域が生命力に満ちた姿を見せるのが、稲爪神社の祭りである。特に秋祭りにおける奉納芸能の練習がされる約一か月間と祭りの日には、むら社会の姿が可視化される。

本研究では、稲爪神社をめぐるむら社会の活動とその変遷を記述することで、第二次世界大戦終戦から 1980 年代の時間軸における社会的変動を、この社会がどのように受け止め、適応していったかを分析する。そのことを通して、このむら社会の現代的在り方を浮き彫りにすることを目的とする。

## 1-2 研究の背景

日本のむら社会については、社会学や民俗学に研究の蓄積があるが、ここでは、本研究に関心の近い人類学的研究をとりあげる。ジョン・エンブリーの『須恵村ー日本の村』[エンブリー 2021 年（原著は 1939 年）]、米山俊直の『日本のむらの百年ーその文化人類学的素描』[米山 1967 年]、そして中根千枝の『タテ社会の人間関係ー単一社会の理論』[中根 1967 年]である。これらの研究を先行研究と位置付けるのは、「社会集団」という人間に普遍的なものの文化的現われ、として対象をとらえる視線を有していることと、エンブリーと米山の研究に関しては、本研究と関心を共有し、かつ日本のむら社会を 1930 年代（エンブリー）、1960 年代（米山）と、本研究に先行する時間においてとらえた研究だからである。

エンブリーの『須恵村ー日本の村』は、1935 年から 1936 年にかけて熊本県球磨郡須恵村に約 1 年間暮らし、日本のむらを描き出したモノグラフである。エンブリーによると、当時の須恵村は 17 の部落で構成されていた。部落は「約 20 世帯から成る自然コミュニティ」[エンブリー 2021 年：58 頁]で、社会的、経済的な単位である。長（おさ）が世話役をして、協同的な基盤に立って、葬式、祭り、道路、橋の普請などを執り行う。それに対して行政区画としての村は、共通の村長、役場、学校、神社によって統一される。人々の暮らしの単位は部落にあり、村は行政上の単位である。須恵村の人たちは、部落のことも村と呼ぶことがあった[エンブリー 2021 年]。

エンブリーは、「部落生活の二つの顕著な特徴は、協同と交換である。」[エンブリー 2021 年：153 頁]と述べている。ここでいう協同（co-operation）とは、「村民のグループが自発的に一緒に作業すること」[エンブリー 2021 年：153 年]である。「協同は「ボス」がいないことを暗に意味し、つまり一緒に働くことを人々に強制する人はいない」[エンブリー 2021 年：153 頁]という。それは、主生業に関わる労働（例 田植え）のみならず、公益的な仕事（例 橋の建設）や非常の際の援助（例 火消し、葬式）、信用貸し（講）、親睦（例 同年講、伊勢講）など、生活の多岐にわたり、彼らは協同において労働を交換することによって多くのことを成し遂げ、さらに仲間意識を育む[エンブリー 2021 年]。

エンブリーは、日本のむら（部落）を、人々のネットワークによる協同・交換によって維持され、それは、基本的にリーダーが不在のむらの成員の助け合いによって成り立っている、ととらえた。そして、それを変容させているのが、国家の政策であるとしている。例えば貨幣経済の浸透によって雇用労働が生まれ、協同から外れても生きていく道が生じていること。また、学校や徴兵によって村人が「国民」意識を持つようになることや、在郷軍人会、国防婦人会、青年団、消防組などの国家が主導して作った全国的な組織が村の生活に影響を及ぼしていることを指摘している。また、かつてはほとんどの部落に神社があったが、エンブリーの調査時においては、国の政策により村に一つの神社をおくのみとされていたことを記録にとどめている。その一方で、お堂は各部落にあり、子どもたちが仏像の傍らで安心して過ごせる空間であるとも分析している[エンブリー 2021 年]。

この研究は、日本のむら社会が変容していく過程を、1935 年～1936 年という時間において描写している。国家主義に傾いていく時代の影響を受けているとはいえ、エンブリーの記述・分析した須恵村は、むらの成員の協同と交換によって自足・自立した、小宇宙である。

米山俊直は、『日本のむらの百年ーその文化人類学的素描』を 1967 年に著した。米山は、当時「封建的（前時代的）」と評価されがちだったむら社会を、消えゆくものとして理解するので

はなく、それが新しい装いをもって存続していく姿を描こうとした。米山は複数のむら社会の姿を記録しているが、あるむらについてはむらの文書を中心に書き、あるむらについては個人の生活史をもとに書き、またあるむらについては俯瞰的な視点で書くなど、記述のスタイルに統一性がない。しかし、米山の書き方以上に、それぞれのむらの様相は多様であり、日本のむら社会の姿が千差万別であることを物語っている。米山はそれらのむらでの調査をもとに、明治維新からの約 100 年に日本のむらが経験した変化として、以下を挙げた。1) 近代国家成立による統合の進行、2) 生活史の変化、3) 教育の変化、4) 儀礼・祭祀の変化、5) 産業化による技術や価値体系の変化、6) 物質文化の変化、7) 交通通信手段の変化、8) 経済的合理性を優位とする価値基準への変化、9) 人の関心圏・行動圏の変化。このような大きな変化の流れの中で、日本のむらがそれぞれの形で変容をしていった姿を米山の研究は示している [米山 1967 年]。

また、むら社会の変遷を考えるうえで、その社会構造の特性をおさえておく必要がある。そこで参考になるのは中根千枝の『タテ社会の人間関係―単一社会の理論』[中根 1967 年]である。まず、中根は、社会集団の構成原理には「資格の共通性によるもの」と、「場の共有によるもの」があるとした。資格の共通性によるものとは、個人の属性（氏、素性、学籍、地位、職業、年齢、性別など）によって社会集団が形成される場合で、インドのカースト集団などがその例とされる。一方、場の共有によるものとは、「一定の地域とか、所属機関などのように、資格の相違をとわず、一定の枠によって、一定の個人が集団を構成している場合」[中根 1967 年：27 頁]で、「～村の成員である」とか、「～大学の成員である」などがこれである。日本社会は場に強い集団意識を示す典型例であるという。そして、この「場の共有」による集団では、集団の枠が強く成員の一体感が強い反面、集団外の人に対しては閉鎖的で、それぞれの集団は孤立しがちであると指摘した [中根 1967 年]。また、中根は、場の共有による社会集団は、その構成員が「タテ」の関係（同列にない者、例えば親分・子分関係や先輩・後輩関係）で結ばれるのに対し、資格による社会集団は、その構成員が「ヨコ」の関係（同列の者、例えばカーストや階級）で結ばれるとした [中根 1967 年]。そして、日本では、家、村、会社組織など、あらゆる社会集団が「場の共有」によりタテの関係で結びつき、強い仲間意識をもっていると論じた [中根 1967 年]。

人々の生活の単位であり、暮らしの場であったむら社会は、とくに明治時代以降大きな変容を遂げてきた。エンブリーと米山が描いたように、むら社会は国家的な変動の影響を受けて変容していったが、むら社会自体が消滅したわけではない。また、中根が指摘するように、どんなに生活のスタイルが変化しても、「場の共有」による社会集団とタテの人間関係を重視する日本の社会構造はほとんど変化していなさそうである。

エンブリーの研究から 80 年以上、米山の研究から 50 年以上が経過した 2023 年現在、日本の社会はさらに変容を遂げ、とくに都市や都市近郊では均質的な風景が広がっている。本研究では、都市近郊の町の一角に、むら社会を見出し、そのむら社会の経験を（今生きている人たちの記憶の届く）1940 年代から 1980 年代において記そうとするものである。日本が敗戦後の困窮から生活を再建し、経済成長を遂げていく。そんな時代にむら社会では何がおこっていたか、むら社会の中心であった神社をめぐる活動を中心に描き出したい。

### 1-3 研究対象

本研究でとりあげるのは、江戸時代の行政区分によると、播磨国明石郡井川庄大蔵谷村であ

る。米山（1967 年）や鳥越（1993 年）は、江戸時代の行政区分としての村が、生活の単位であるむらに重なることが多かったと述べているが、江戸時代の大蔵谷村はかなり広く、それを「実質的に生活を共にする単位」とみなすのは難しい。大蔵谷村（枝村である太寺村を大蔵谷村の一部と考える）は、西を明石城下町、東を山田村・多聞村（後の垂水村の一部）、南を海、北を井出村・生田村・漆山村（後の伊川谷村の一部）に接する領域と考えられる<sup>2)</sup>。

そのなかで、最も人が集住していたと考えられるのが、山陽道（西国街道）に面した地域である。それは、1804 年に出版された、秦石田と中井藍江による『播州名所巡覧図絵』に描かれた「大倉谷」に重なる。大倉谷の絵図では、山陽道沿いに家々が立ち並び、八幡宮、稻爪大明神、休天神が描かれている。街道は海沿いを走り、海では漁師たちが網を引いている〔秦（村上）1995 年〕。このエリアは、昭和 4 年（1929 年）の地図で大蔵町 1 丁目～8 丁目とされていて（図 1）、現在では大蔵八幡町、大蔵町、大蔵中町、大蔵本町、大蔵天神町と呼ばれている<sup>3)</sup>。1929 年の地図を見る限り、ここより北に家は少なく、このエリアをひとつの生活の単位である「むら」ととらえることは妥当だろう。本研究では、この地域を「大蔵谷」と呼ぶことにする。大蔵谷はより広い地域を指す地名でもあるため弁別のため、「」をつける。

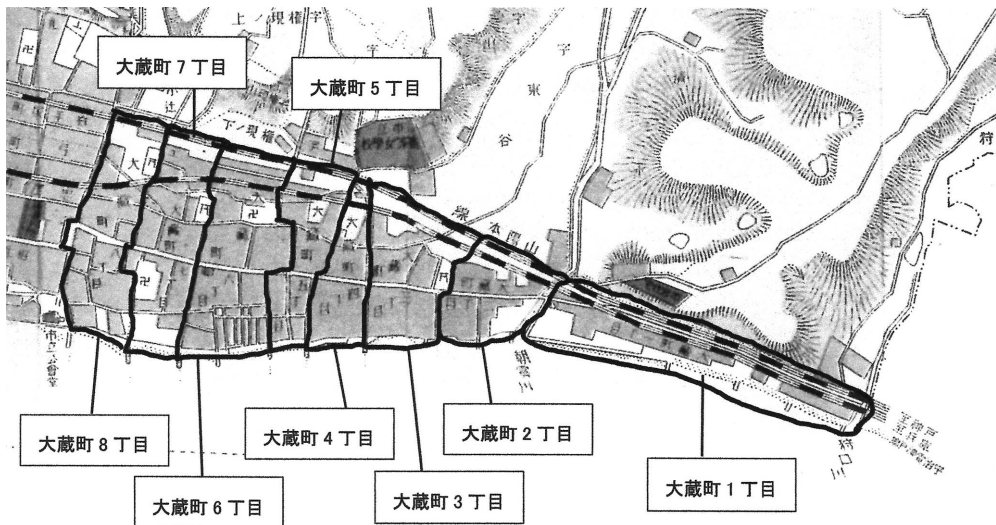


図 1 「大蔵谷」（明石市大蔵町 1 丁目～8 丁目）

\* 1929 年作成の明石市役所による地図（明石市役所『明石市勢一斑（第拾回）』1929 年所収）をもとに編集した。

「大蔵谷」は、古くから山陽道の駅邸がおかれた陸の交通の要所であり、また、本州と淡路島を隔てる明石海峡に面し、海上交通においても重要な位置にあった。また、17 世紀の明石城築城後は明石城下町に隣接し、大名行列が宿泊する本陣があったことなどを考えると、古くから比較的開けたむらであったと考えられる。

江戸時代元禄期（1688 年～1704 年）の末年頃、太田小左衛門が撰した地誌『采邑私記』によると、大蔵谷村は山陽道の駅邸であり、駅馬が 30 匹飼われていたという。大蔵谷村の税米高は 839 石 5 斗 4 合（大蔵谷村と枝村である太寺村を合わせた石高）とある。海浜があって漁に適していること、村民は「あをのり」をとって売ること、初夏には蓼穂が食べられること、などが書かれている。また、稻妻神社<sup>4)</sup>は大蔵谷村の鎮祠であると書かれている〔西川・中村 2022〕。

稲爪神社について、1920 年から 1933 年にかけて著された『明石名勝古事談』には、「享保四年九月大蔵谷村中の土産神となし」[橋本 1974 年：第三本 62 頁]と書かれている（享保 4 年は 1719 年）。土産神はおそらく産土神のことだろう。このことから、本研究で着目する稲爪神社は、「大蔵谷」というむら社会の中心と考えられ、稲爪神社の活動を軸にこの地域社会を描くことは妥当と考える。図 2 に、「大蔵谷」の氏神である稲爪神社と、「大蔵谷」の人々が守っている穂蓼八幡神社、休天神、濱えびす社、権現山（熊野皇大神社だが「大蔵谷」では権現山と呼ばれている）の位置を示す。（但し濱えびす社は海岸浸食により移動し、現在は稲爪神社敷地内にある。また、権現山の神々も、近年稲爪神社に移動した。）

江戸時代の「大蔵谷」はむら社会とはいえ、その立地から、多様な人々がここに住んだ。この地で代々漁業や農業をしてきた人々の他にも、街道沿いで宿屋や商店を営んでいた人々がいた。また、「17 世紀に殿様（松平直明）と共に越前大野からこの地に引っ越ししてきた」という伝承を持つ人々もいる。

今日の「大蔵谷」地域は、様々な時代の建築物の混在する住宅地である。国道は車の往来が激しいが、旧街道沿いは静かである。かつて白砂青松の景観が有名だった海岸は埋め立てられ、人工の砂浜が作られている。旧街道から参道を少し入ったところに稲爪神社はある（図 2）。

本研究の内容の多くは、2020 年から 2023 年に筆者が実施した「大蔵谷」での観察および聞き取り調査によるものである。また、並行して文献調査も実施した。お話を伺った人々の表記は基本的にアルファベットとする。資料の引用部に実名が書かれている場合は実名を記す。稲爪神社の宮司さんについては役職によって個人が特定できるため、実名表記をする。

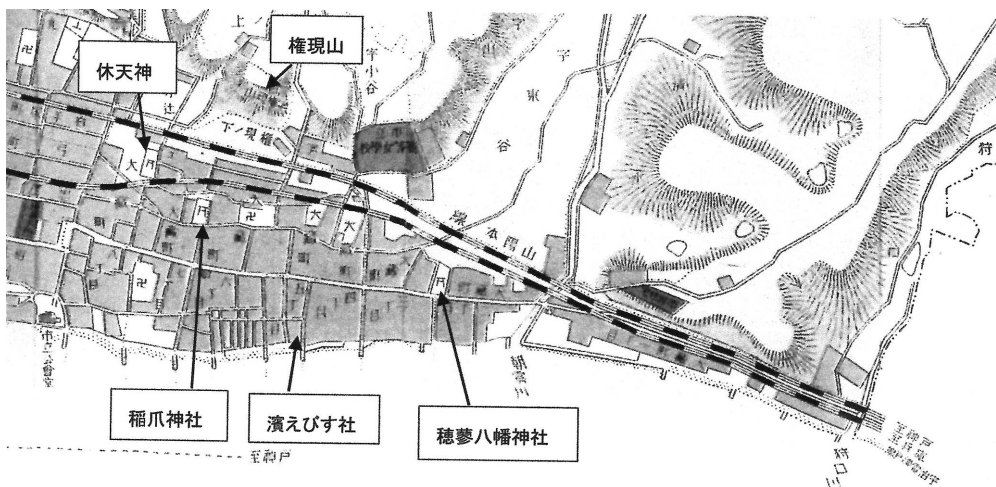


図 2 稲爪神社・穂蓼八幡神社・休天神・濱えびす社・権現山の位置図

\*1929 年明石市役所による地図（明石市役所『明石市勢一斑（第拾回）』1929 年）をもとに編集した。

## 2 稲爪神社とむら社会

### 2-1 稲爪神社の縁起

稲爪神社は推古天皇の時代の伝承を由来とする。

『稲妻大明神縁起』によると、推古天皇の頃、三韓から鉄人を大将とする軍勢が侵入してきた。

この軍勢を九州で止めることができず、軍勢は中国、四国へ進撃する。伊予国の小千益躬が三島大明神に詣でて祈願をしたところ、三島大明神が出現し、神託があった。益躬は神託にならって一計を企て、鉄人の軍勢に投降したふりをして、道案内を買って出た。軍勢が明石にさしかかった頃、空がかき曇り、雨が降り、稲妻がおこった。大蔵谷の西に五色の雲が立ち上り、その光輝く中に、三島大明神の出現を小千益躬は思った。鉄人の馬は足が萎えて進まない。益躬は鉄人の足の裏に目があることを発見した。隠し持っていた矢を投げたところ、矢は鉄人の足の裏から頭まで貫通し、鉄人は討ち取られた。これは三島明神のご加護であったということで、大蔵谷の西に、明神が出現された土地に、益躬が神社を作り、三島明神を勧請した。これが、稲妻大明神である。（『明石市史資料 第5集』1985年掲載の『稲妻大明神縁起』を典拠とし、内容を要約した。）

なおこの縁起には、稲爪神社は天正6年（1578年）、高山右近によって焼かれて縁起が焼失したため、貞享3年（1686年）、『予章記』をもとに書いた。という後書きが付いている。小千益躬を祖先とする河野氏の歴史を記した『予章記』と『稲妻大明神縁起』の対応関係については中村健史が整理しており、縁起のほとんどが『予章記』からの引用であることを明らかにしている[中村 2020年]。

伊予国の三島大明神は、瀬戸内海の大三島にある大山祇神社に祀られている。稲爪神社の縁起は、瀬戸内海を介して、伊予と明石に交流があったことを示している。

## 2-2 稲爪神社と「大蔵谷」

先述したように、稲爪神社は、享保4年（1719年）に大蔵谷村全体の土産神（産土神）とされたという記録があるが、稲爪神社の氏子地域は、江戸時代の行政区域としての大蔵谷村と完全に同じという訳ではない。『明石名勝古事談』には、「享保四年九月大蔵谷村中の土産神となし東本町篠屋長右衛門の門前石橋より以東を神社の氏子とす」[橋本 1974年：第三本：62頁]と書かれている。この東本町は、明石城下町にある。

2023年現在、稲爪神社の氏子地域の西端は、「魚の棚市場の座古海産さんの西の壁」とされ、この壁から南北にまっすぐ引いた線より東が稲爪神社の氏子域とされている。座古海産という商店はかつての東本町あたりに位置し、この境界は江戸時代から変わっていないと推測される。また、北は大蔵谷村の境界よりも北に食い込み、「伊川谷高校の前の道まで」である。伊川谷高校は現在の町名では伊川谷町長坂にある。東は「一部狩口」とされ、狩口地域の一部分を含む。また、南は海である。

戦後間もない頃の稲爪神社秋祭りの写真がある。神輿行列の中に、町名を書いたのぼりや旗、法被などが写っており、大蔵町、山下町、桜町、相生町、上ノ丸、東仲之町、細工町などの町名が読み取れる（写真1には「細工町」「錦江町」の名前が見える）。このうち大蔵町を除く町は、いずれも両馬川より西に位置し、明石城下町エリアである。



写真 1 終戦直後再開された稲爪神社秋祭り (1) (稲爪神社蔵)

このように氏子地域の広い稲爪神社であるが、神社の活動を中心的に支えてきたのは、神社に近い、「大蔵谷」(大蔵町 1 丁目～8 丁目) のむら社会の人々であったと考えられる。「大蔵谷」には 4 つの組があり、西之組、中之組、濱之組、東之組と呼ばれてきた。1966 年の住居表示整備以前の町名で説明すると、西之組は大蔵町 7 丁目と 8 丁目、中之組は大蔵町 4 丁目、5 丁目、6 丁目の内陸側、濱之組は大蔵町 4 丁目、5 丁目、6 丁目の海側、東之組は大蔵町 1 丁目、2 丁目、3 丁目である<sup>5)</sup>。

それぞれの組は、稲爪神社の祭祀において役割を持つ。例えば、秋祭りでは神が氏子地域をめぐる神興行列があるが、この時、神輿と鳳輦(ほうれん)を、4 つの組がまわり持ちで担いだという。神輿と鳳輦は、共に神の乗り物である。また、秋祭りの宵宮では、西之組と中之組は獅子舞を奉納し、濱之組は囃子流しを奉納していた。東之組にもかつて(おそらく大正期まで)は獅子舞があったようだが、現在生きている人の記憶の届く限りでは、東之組は獅子舞の奉納はしていない。そのかわり、神輿や鳳輦を担当しない年は、東之組が守る穂蓼八幡神社の布団太鼓を出して神興行列に加わってきた。

### 2-3 組の奉納芸

「大蔵谷」の獅子舞の由来についてはいくつかの説があるが、秋月種実(1548 年－1596 年)から伝えられたという伝承がある。『明石名勝古事談』第三本によると、秋月種実が上洛の途中、大蔵谷に宿泊した。ちょうど稲爪神社秋祭りの宵宮であった。秋月氏は、因縁ある<sup>6)</sup>稲爪神社の神であるからと、神前に神楽を為した。それは、天の岩戸で行われた神楽のやり方で、神社の巫女は、「アマノウズメノミコトが天の岩戸の前で獅子の舞をした時の曲」を舞った。村人はその形をまねて、祭日(9 月 9 日)には必ずだんじりを出し、天の岩戸の音楽のつもりで、笛と太鼓と鉦で獅子舞をするようになった。その時、お多福(アマノウズメノミコト)、ヒヨタマ(タヂカラヲノミコト)、鼻高(サルタヒコノミコト)の三神を添えて浮かれ踊る[橋本 1974 年]、とある。

この、三神と獅子の舞は、現在は、大蔵谷西之組(西之組と呼ばれる)と、大蔵谷獅子舞保存会(保存会と呼ばれる)という二つの集団によって継承されている。今日は、20 以上の芸があり、西之組と保存会で少し異なる。多分にアクロバティックでストーリー性のある「大蔵谷」の



獅子舞は、古くから高く評価されていたようだ。

西之組には、明石城城主松平公にいただいた、せんま（タヂカラヲノミコト）の面が伝えられている。OJ さん（1931 年生、西之組）は、「獅子が池に映る自分の姿に驚く芸は、明石の殿様がほめてくれたそうですよ」と述べた。せんまの面は、この時殿様からいただいたものであるという。また、東之組には、舞子にあった有栖川宮家の別邸に滞在した宮様（後の大正天皇）に獅子舞を披露したという話が伝えられている。今日では獅子舞は途絶えたため、東之組の獅子頭は、東之組が守っている穂蓼八幡神社におさめられている。さらに、昭和 27 年（1952 年）には、中之組が皇居で獅子舞を披露した。この時三人継ぎという大技の一番上に乗る役をした MT さん（1942 年生）は、その時の記念写真を持っている。

一方、濱之組は、獅子舞は行わず、囃口流し（はやくちながし）という唄を神に奉納する。「大蔵谷の囃口流し保存会」作成の資料によると、400 年の歴史がある民俗芸能で、木遣り（けやり）と囃口を対で歌う。けやりは短く、囃口の前歌として唄われる。三味線、太鼓、鉦が使われる。囃口は、「魚づくし」、「ふくづくし」、など、言葉遊びのようなものが多い。濱之組は海に面し、漁師や網元の家が多かった。FA さん（1934 年生、濱之組）によると、濱之組のアイデンティティを示すため、稲爪神社の神輿や鳳輦を担ぐ時も、けやりを唄ったものだ、という。

東之組は、東之組が神輿や鳳輦を担当しない年は、布団太鼓を担いで稲爪神社の神輿行列に参加した。この布団太鼓は、東之組が守っている穂蓼八幡神社のものである。

西之組の獅子舞、中之組の獅子舞、濱之組の囃口流し、東之組の布団太鼓、それぞれを担ってきた人々は、それらに愛着と誇りをもっている。

また、これらの組は、稲爪神社以外にも守っている神社がある。穂蓼八幡神社は東之組、権現山は中之組、濱恵比寿は濱之組、休天神は西之組が守ってきた。これらの神社は、いずれも稲爪神社の宮司によって祭祀が行われる（図 2）。

### 3 社会の変化と「大蔵谷」

#### 3-1 戦後の祭りの再開（1947 年～1950 年代）

1926 年生まれの IY さん（中之組）がはじめて獅子舞を行ったのは、学校を卒業後の昭和 16 年（1941 年）だったという。この頃獅子舞は大人がやるものであり、子どもの参加は三人継という大技の一番上に乗る役（てっぺん）だけだった。15 才で獅子舞を始めたものの、この当時は大人の男性たちが兵隊にとられており、中之組で獅子舞を支えたのは、兵役から帰ってきた人と、20 才までの若い人だったという。そして、1945 年と 1946 年は稲爪神社の秋祭りは執り行われなかった。

祭りは 1947 年に再開された。写真からは、この時の祭りは盛大なものだったことがわかる（写真 1、写真 2）。この頃の秋祭りは、10 月 8 日、9 日、10 日の三日間で、宵宮（8 日）には神社門前で組の芸の奉納がされた。また、本宮（9 日）には神輿や鳳輦が氏子地域を巡行する神輿行列があった。そして、後宮（10 日）では、それぞれの組は氏子地域の家々をまわり、芸を披露してお花（祝儀）を集めたものだという。



写真2 終戦直後再開された稲爪神社秋祭り(2)(稲爪神社蔵)

1934年生まれのFAさん(濱之組)は、終戦から間もない頃、囃口流しの太鼓を叩かせてもらった。その時に、自然に囃口流しをおぼえたという。それを大人の前で何気なく口ずさんだら、「おまえ、やれ」「宮入できるぞ」とほめられた。また、当宿(世話役)の家で囃口流しの練習をすると、ふかしたサツマイモがもらえた。食糧難の時代で常にお腹をすかせており、これも目当てだったという。FAさんが稲爪神社の神輿を初めて担いだのは、15才の時のことだった。「こんな人数で担いでいけるんかいな」と思ったという。濱之組は地理的区分けが狭く、人数が少なかったのである。

1937年生まれのIKさん(東之組)は、稲爪神社の祭りの時は小学校が休みになったので、神輿行列の道具持ちをしたという。神輿と鳳輦は稲爪神社から西へ、そして、「明石銀座通り」と呼ばれる道を北上し、太寺の天王さん(天王神社)まで山道を登った。天王さんは稲爪神社の御旅所で、拝みをした。朝早く出た一行は、天王さんで握り飯とこうこを食べるのが習慣だった。そこから東の松ヶ丘方面に出て、南下していったという。

神輿行列はただ歩くだけではない。若い衆は荒々しく、隙があれば神輿を海につけようとする。それを阻止するために、取締役が神輿に紐をつけてろくろに巻きつけ、見物している子どもらに「巻けー!!」と指示を出したという。IKさんの父が組を仕切っていた頃のことだ。当時は船を引き上げるためのろくろが海岸にあった。また、お花代をくれなかったり少なかった家の畑で神輿を暴れさせたりもしていたようだ。(写真3)



写真3 畑を荒らす神輿の担ぎ手たち（稲爪神社蔵）

稲爪神社の菅谷宮司によると、神輿には荒魂（あらみたま）がのっており、鳳輦には和魂（にぎみたま）がのっている。それは、神の二つの側面である。神輿は荒々しく練り歩くものだが、鳳輦はしずしずと進むものである。しかし写真を見る限り、鳳輦も荒々しく扱われている様子がうかがえる（写真4）。



写真4 神輿と鳳輦（稲爪神社蔵）

IKさんによると、祭りの時は多少のことは目をつぶってもらえたものだという。東之組の布団太鼓を交番にぶつけたこともあったが、「祭りのことやから」と許してもらえた。

1942年生まれのMTさん（中之組）は、小学4年生から中学1年生まで、獅子舞の三人継の「てっぺん」を務めた。土台となる人の肩に一人が立ち（中乗り）、その人の肩の上に一人（てっぺん）が立つ、という芸である。怖くなかったか、という筆者の問いに、「あの頃の獅子舞は、百姓が多くて、肩がしっかりしていた」と述べた。

また、1940年生まれのUKさんは、「獅子舞はやめとけ」と父に言われ、獅子舞には参加しなかったが、神輿の巡行では、旗持ち（写真2）をしたという。父が獅子舞を止めたのは、当時

の農家の若者は肩が強く、「あの子らといっしょにしたら、もたへんぞ」という理由からだった。IY さんによると、この当時の中之組はほとんどが農家で、人丸小学校から明石高校あたりまで畑ばかりだったという。

これらの語りから、1950 年代頃までは、居住地域によってどの組に属するかは決まるが、その地域に住んでいるからといって祭りの神輿巡行や組の奉納芸に参加しなければならなかった訳ではないことがわかる。この当時獅子舞は 15 才で学校を卒業した男性が参加を許された。また、子どもは三人継の「てっぺん」として参加する程度であった。

一方、稲爪神社の神輿や鳳輦の巡行では、子どもたちも旗持ち、道具持ち、お稚児さんなどとして参加した。祭りは学校が休みになる特別な機会だった。また、神輿行列の話からは、荒々しく元気のよい気質が「大蔵谷」にあったことがうかがえる<sup>7)</sup>。

当時は農業や漁業など肉体労働に従事する人が多く、神輿行列や獅子舞を担う人材には困らなかった。各組はプライドを持ち、奉納芸に磨きをかけ、神輿と鳳輦の巡行を担っていた。それが大きく変わるのが 1960 年代である。

### 3-2 高度経済成長期におけるむら社会の危機（1960 年代）

1960 年代に入る頃から、祭りが急激に廃れていった。人手が足りないため神輿も鳳輦も巡行せず、各組の奉納芸も担い手がなかなか集まらないという事態がおきていたようだ。IY さんは、「昭和 40 年（1965 年）の後先の頃、（中之組の獅子舞が）切れた」と表現した。1969 年には、なんとか獅子舞奉納を続けていた西之組にも危機が訪れた。『天神町子供会 ひろば』という西之組の地域広報誌に、この時のことが次のように記録されている。

高度経済成長で景気がよくなり、人々が仕事に夢中になったせいか、1969 年の秋祭りにおいて、年配者たちがだんじりを組んで準備を進めていたのに、獅子舞の舞手となる若者が誰一人来なかった。仕方なく、年配者たちだけで獅子舞の宮入を行った。「この祭りの時、数えて六十才でありながら三人組の台をやったうちの親爺の肩に乗り、見事にその中乗りの芸を終た網谷さんが、ひらりと前に飛び降りた時に七十一才と云う年には勝てず思わず尻餅をついてしまわれた事があった。あの名人上手の網谷さんがである。その時、平均年齢が六十才を越す皆の心の中には『もう、これで西之組の獅子舞も終りや。わしらの代で最後やなあー』とつぶやきがもれ伝統の火が消えてゆく淋しさに気も重く沈み切ってしまった。」[藤谷 1980 年：3 頁]

大蔵谷の獅子舞は大変な力業で、平均年齢が 60 才の人々には相当な負担である。文中、「三人組」とあるのは、「三人継」のことで、そんな大技を年配者がやることは普通考えられない。

若い人が祭りに集まらなくなったのは、人口の減少が原因とは考えにくい。図 3 は、「大蔵谷」の人口の推移を示している。徐々に減少しているが、1960 年代、1970 年にはまだまだ人が多く住んでいた。この時代、若者は仕事を求めて地域の外に出て行ったと考えられる。長く農家や漁家の人たちが中心になって支えてきた祭りに、担い手の変化が起きていたということだろう。

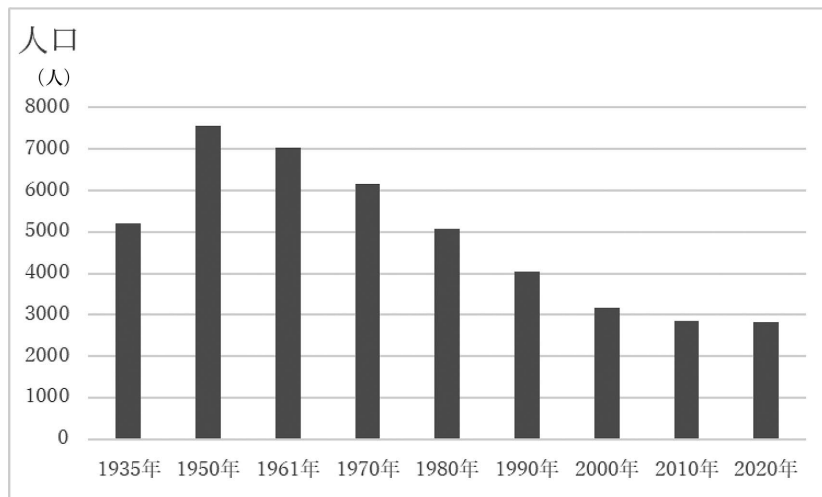


図3 「大蔵谷」の人口の推移

- 1) 次の資料を基に作成した。『昭和十五年版 明石市勢一斑（第式拾壹回）』1940年／『明石市勢年鑑 1950年版』1950年／『明石』1962年／『明石の人口 45年国勢調査から』1970年／『明石の人口 昭和55年 国勢調査結果報告書』1983年／『明石市統計書（平成2年版）』1991年／『明石市統計書（平成12年版）』2001年／『明石市統計書（平成22年版）』2011年／『明石市統計書（令和2年版）』2022年
- 2) 1961年までのデータは大蔵町1丁目～大蔵町8丁目のもの。1970年からのデータは大蔵八幡町、大蔵町、大蔵中町、大蔵本町、大蔵天神町のものである。
- 3) 1935年と1970年、1980年のデータは国勢調査によるもの。1961年のデータは住民登録人口である。1990年、2000年、2010年、2020年のデータは住民基本台帳人口である。1950年のデータについては典拠が記載されていなかった。
- 4) 1940年のデータが入手できなかったため、1935年のデータを使った。1960年のデータが入手できなかったため、1961年のデータを使った。

例えばIYさんは、当時、タンカーや潜水艦のエンジンの配管の仕事をしていた。仕事を終えて自宅に帰ってから、獅子舞の練習をした。「獅子舞は『晩の部』」であるという。朝から仕事をし、夜に獅子舞をするのが勤め人にとって辛かったことは、容易に想像できる。

この頃西之組では、奉納芸の継承への不安から、獅子舞を映像で記録する取り組みをはじめた。この役割を担ったOJさんは、はじめは8ミリフィルム、後にはビデオで記録を撮り続けたという。

西之組の年配者たちが必死の思いで獅子舞の奉納をした1969年、明石市は市政50周年を迎え、市民に獅子舞を披露してくれないかと、稲爪神社にもちかけてきた。『天神町子供会 ひろば』によると、西之組のFYさんにこの話が伝わった時には既に承諾の返事がされており、断るのは難しかった。かといって、一般市民の前に年配者だけで獅子舞をして、失敗をしたら「大蔵谷」の恥になる。困っていたところ、中之組の獅子舞経験者たちが協力を申し出てくれた。彼らはFYさんと同じ農家の人たちで、仲間意識があったのである。この機会をとらえてFYさんは、「どおや、今のままでは祭りに獅子舞がなくなってしまう。それどころか、稲爪<sup>ママ</sup>さんから伝統行事がなんにもなくなってしまうやないか。どや、神事を保存する会でも作って一緒にやってゆこうじゃないか」[藤谷 1980年：3頁]と呼びかけをした。これに応じた東之組、濱之組、中之組、西之組の有志が集まり、「神事保存会」が結成されたという[藤谷 1980年]。

市制50周年に関しては、中之組と西之組が合併して大蔵谷獅子舞保存会を結成し、獅子舞を

披露した（写真5）。参加した IY さんによると、この頃獅子舞を知っている人は年配で、実際に舞を踊れるのは自分たちの世代（IY さんは当時 43 才）だったという。



写真5 市制 50 周年記念の時の獅子舞保存会（野川信博さん蔵）

また、神事保存会は、獅子舞だけではなく、神輿・鳳輦の巡行や、牛乗りの神事<sup>8)</sup>、濱之組の囃口流しなど、稲爪神社に関する神事全般をもりたてていく目的で組織された。

1960 年代は、稲爪神社をめぐるむら社会にとって大きな試練となった。農家や漁家の人々が主力となって担ってきた神輿巡行や奉納芸が、担い手の不足によって途絶える、という事態が起きた。それは、勤め人として地域の外に働きに行く人たちが増えた結果であると考えられる。日本の産業構造の変化が、このような形で地域社会に影響をおよぼしていたのである。奇しくも明石市の市政 50 周年記念という機会があり、西之組と中之組が合同で獅子舞をした。また、4 つの組が協力して神事を盛り上げる神事保存会ができた。

### 3-3 むら社会の再生（1970 年代～80 年代）

人手不足から稲爪神社の神事継承が危ぶまれていた 1970 年代のはじめ、青年団とヤング大蔵という二つの社会集団が結成され、むら社会を再生させていく原動力となる。

一方、神事保存会は、比較的早い時期から規模を縮小した。例えば東之組の IK さんは、「これは神事保存会と言いながら、獅子舞保存じゃないか。それに東之組の（布団）太鼓のことは一つも言わん。それで私は脱会した」という。また、神事保存会の発起人だった FY さん（西之組）も、「これでは獅子保存会やから」と、会長を辞めてしまったという。後に、獅子舞保存会も脱退し、今日の神事保存会には囃口流しと牛乗りの神事のみが残っている。

#### 3-3-1 青年団の発足

IS さん（1951 年生）によると、1970 年か 1971 年頃、中学校の同級生たちで集まっていて、「この頃は祭りもなければ盆踊りもない」という話になり、「おれたちで盆踊りをしよう」と、思いつくままに実行したという。提灯に近所の店に名前を入れてもらうことで資金を集め、知人らの助けを得てやぐらや配線を整えてもらい、大蔵中町の南側の空き地で盆踊りを実現した。自分たちのことは「大蔵連合青年団」と名付けた。翌年も盆踊りを実施したが、その時集めた資金が

余ったため、運動会も開催した。盆踊りと運動会は、その後も継続的に実施したという。

青年団の活動は、多岐にわたっていく。獅子舞保存会に入り、1972年には稲爪神社の宵宮で獅子舞の奉納をした。また、消防団のなり手がいないということで声がかかり、1973年に15名程度の青年団員が消防団に入団したという。

また、ISさんによると、この頃、稲爪神社の秋祭りでは、神輿や鳳輦がトラックの荷台に載せられて巡行していた。青年団の一人が「神輿担がんか？」と言い出した。そこで、「担がせてもらえませんか」と願い出たところ、二年にわたって断られた。「70人集めたら、担がしたる」と言われ、やっと三年目に神輿を担げるようになったという。

ISさんと共に青年団を作ったICさん（1951年生）は次のように述べた。「この頃獅子舞が途切れていた。神輿も担がれん。消防団もなり手がおらんかった。自分らが青年団を結成してやな、盆踊りとかやった。提灯売ってファンデ集めてな…。」青年団は、当初の目的だった盆踊りの主催だけでなく、獅子舞を継承し、神輿を担ぎ、火消しもする、多様な役割を担う社会集団になっていったのである。

また、青年団は後輩の勧誘を組織的に行った。この頃大蔵中学校で、教員に部活動の仕事をさせないという動きがあったため、地域社会から部活動の指導や世話をする人員を探すことになった。それが大蔵コミュニティーセンターという組織になったのが1972年のことである<sup>9)</sup> [明石市立大蔵コミュニティーセンター 2002年]。そのようなことがあって、青年団のメンバーには、大蔵中学校の部活の顧問をしている人が何人もいた。

「この頃中学の教師に部活の指導をさせたらあかん、ってことになって、地域から部活の指導者を募った。わしは水泳部の指導をした。この部活で知り合った若い子を、消防団や青年団に誘ったんや」と、ICさんは語る。このような青年団の動きにより、獅子舞保存会も消防団も人員が増えていった。また、稲爪神社の神輿も担がれるようになった。

消防団とは、普段は消防士以外の職業に就きながら、いざという時には地域における消防活動や救助活動、災害警戒活動などを行う団体である [兵庫県・公益財団法人兵庫県消防協会パンフレット]。統括するのは地方自治体である。『須恵村』において、エンブリーは、消防組（現在の消防団）という全国組織ができる前は自警の消防があり、25才から40才の男性が参加していたと記述している [エンブリー 2021年]。消防団は、もともとむら社会にあった協同的な組織を全国組織に置き換えたものである。大蔵谷においては、青年団のメンバーが消防団に多く入団する流れができたことにより、消防に関するむら社会の協同が復活したといえる。

この消防団は、1977年の稲爪神社の本殿火災の時にも活躍した。「神社の火災は、僕は、大蔵中学で水泳指導していた時で…。ぼくら消防団員が駆けつけて、火消しをした」と、ICさんは言う。本殿再建のため、当時64才だった先代の久礼宮司や総代を中心に、資金集めをした。各町の人が資金を集めてくれて、その度に久礼宮司もそこに足を運んだという。こうして集まった資金は大変な額で、1979年、稲爪神社本殿の再建を成し遂げた。

### 3-3-2 ヤング大蔵の結成

1972年～1973年頃、青年団よりは年齢層が高い30才代の人たちが中心になって「ヤング大蔵」を結成した。FAさん（濱之組）は次のように述べた。「大蔵町には4つの組があって、組意識があるんです。祭り以外でも、『あいつ、東や』とかいう意識があった。それでね、そういうことではいかんと、私らが明石で一つの組織を作ろうやないかと、ヤング大蔵を立ち上げまし

た。はじめ、80 人ぐらいの人が集まりましたね。(中略) まず、大蔵町をまとめよ、と思った。いろいろと行事をした。祭りはもちろん、年末は夜回り、拍子木をたたいて。それからごみ箱。缶にペンキぬって、ヤング大蔵と書いて、各地域に置いたり、ボランティア的なことをやった。大蔵町のためになることを。」

ヤング大蔵結成時には、新住民(新しく「大蔵谷」に住み始めた人々)にも声をかけたようだ。FA さんは言う。「市民会館で立ち上げの総会をした。80 人ほど会員がいた。錦明館の(跡地にできた)マンションからもよく入っていた。賢い人も何人もおったで。それを後の会長らが来んようにしてしもうて…。」

FA さんによると、この地域は外から来た人を「よそ者」とみなす意識を持っている人が多い。FA さん自身は、「よそから来たもんほど、かわいがらなあかんで」と言ってきたが、異なる考えの人もいるという。ヤング大蔵も、はじめ、能力のある人がたくさんいたが、できる人が活躍できる場を用意しない。それでやめていくのだという。

ヤング大蔵も、青年団と同様に多様な活動をした。IK さん(東之組)によると、「稲爪も神輿も寝たままやんけ」と、神輿の巡行を復活させたという。錦明館(「大蔵谷」の西端、海端にあった)の前まで神輿を担ごうとしたが警察の許可が下りず、山陽道を巡行するだけで我慢したという。後年、鳳輦も巡行するようになった。また、巡行範囲も広がり、明石の繁華街である銀座通りまで行けるようになったという。

「神輿を担いで巡行すること」の復活に関しては、先述した青年団のエピソードと、ヤング大蔵のエピソードがある。これらの時系列上の関係は不明であるが、両方の社会集団が、神輿や鳳輦を担いで巡行することの再開に関わっていることがわかる。この他にもヤング大蔵と青年団の活動には重なるものがいくつかある。このことは、青年団とヤング大蔵が、どちらも「地域のためになる活動」をした社会集団であり、潜在的にはライバル関係にあったことを示唆している。

一方、集団の成員の属性を反映した活動もあり、例えば子どものいる世代だったヤング大蔵の活動には PTA と連携したものもあった。IK さんは、1981 年、設立したばかりの中崎小学校の PTA 会長になった。二年目の運動会の日、夜間降っていた雨は小雨になったが、運動場が水浸しだったという。

「それで、私は、ヤング大蔵に連絡しましたんや。そしたら、父母たちが手に手にバケツとぞうきんもって運動場に集まってきてね、それで中崎小は運動会ができたんです。この時(隣の)人丸小は運動会を中止したから、あとで、『中崎はやったのに』と言われたと、人丸小の PTA 会長が言っていましたわ。」

IK さん自身ヤング大蔵のメンバーだったので、この連携は自然な発想だったのだろう。また、ヤング大蔵というむらの社会集団と PTA という学校組織の境界があいまいであったこともわかる。

### 3-3-3 明石市の動き

青年団やヤング大蔵が結成された頃、明石市がコミュニティづくりに力を入れはじめていた。1975 年、明石市は「コミュニティ元年」宣言をした。当時、明石市は神戸や大阪のベッドタウンとなり、昼の人口が減って活気が失われることを危惧していた。この宣言は、旧住民と新住民が協力して、住みがいのある明石をつくっていかう、という呼びかけである[明石市史編さん委員会 1999 年]。



明石市コミュニティ研究会の「みんなで考えるまちづくり」（1974 年）という文章がある。明石市コミュニティ研究会は、明石市によって結成された、市内の有識者、新聞社、市職員 10 人による研究会である〔明石市史編さん委員会 1999〕。以下、一部を引用する。

その土地に何年住んでいるか、家柄はどうか、社会的な地位はどうか、年齢はどうか——伝統と慣習によって組み立てられた組織は、町が姿を変えるように、体質の変化を要求されているようです。仮りに、このような社会を「タテ社会」と呼んでみましょう。／最近の住民運動をよく分析してみますと、これまでタテ社会を支えてきた要素はむしろ拒否されています。（中略）／この運動を支えている要素は、住民すべてが自由に参加し、平等に発言できる住民主体の合意（コンセンサス）に基づく自治活動＝コミュニティ活動だということです。ここに新しい市民意識の芽ばえがうかがえます。／単に、そこに住んでいるという「住民」から、住んでいる町や市のよさを守っていく、育てていく「市民」へと脱皮していくわけです。／このような市民社会は、伝統とか古いしきたりによって無意識に統制されていた「タテ社会」とは異質の「ヨコ社会」の誕生と呼べないでしょうか。コミュニティを支える原理は、このヨコ社会だということがいえそうです。〔明石市史編さん委員会 2001 年：552 頁－553 頁〕

この文章では、「伝統や古いしきたりによって無意識に統制されたタテ社会」から、「住民すべてが自由に参加し、平等に発言できる住民主体の合意に基づく自治活動＝コミュニティ活動（ヨコ社会）」への転換を呼びかけている。ここで使われている「タテ」、「ヨコ」という言葉は、当時広く読まれていた中根千枝の著書（1967 年）に触発されていると考えられるが、中根の概念とは意味がずれている。とにかく、行政主導の「コミュニティづくり」は、伝統社会のしがらみにとらわれることなく市民が平等に参加、発言できることをめざしていた。旧住民と新住民が共に参加できることを重視していることがわかる。

青年団やヤング大蔵は、この行政主導のコミュニティづくりとは文脈が異なる。伝統社会には制約は存在するが、同時に、公益のために人々が協力し合う力も強く働く。エンブリー（2021 年）が日本のむら社会に見出したのは、人々が様々な形でつながる協同であった。「住んでいる町や市のよさを守っていく、育てていく」思想はむら社会に既にあり、青年団やヤング大蔵は、そんなむらの価値観に基づいた社会集団であったといえる。

### 3-3-4 中之組と西之組の取り組み

1969 年、中之組と西之組が合併して「大蔵谷獅子舞保存会」を結成したことは先述した。その若い担い手として青年団に声がかかり、青年団の若者たちは大蔵谷獅子舞保存会のメンバーとなり、当時 40 才代ぐらいの人たちから獅子舞を習った。青年団の団員だった IS さんによれば、中之組と西之組両方の人から獅子舞を習ったため、中之組と西之組が混ぜ合わさった芸が保存会の芸になっていったという。西之組の芸は荒々しくて短く、中之組の芸は荒くはないが長かった。また、演目は大方重なるものの、独自のものもあった。もともとライバルであった両者には意見の相違や張り合いがあり、次第に西之組が保存会から離れていったという。

1989 年生まれの SH さん（西之組）が父から聞いた話によると、1970 年代に、霊法会という宗教団体の明石支部の人たちが「獅子舞を教えてほしい」と SH さんの父に相談してきたとい

う。そこで、SH さんの父が西之組に紹介し、西之組の人たちが霊法会の若者たちに獅子舞を教えた。それと同じ頃、天神町子ども会を母体に「子ども獅子」が作られた。大蔵天神町は西之組の地域である。これを機に、1979 年、保存会から離脱し、西之組が再結成された。

この時小学生として参加した NN さん（1967 年生）は次のように話した。「ぼくが 6 年生の頃（1979 年）、途絶えていた西之組の芸を復活させるということになって。網谷さんという当時 80 才代ぐらいの人が名人でね、西の原型をご存じだった。（中略）この人から基礎を教えてもらった。僕のおやじが天神町子供会の会長で、もともと西之組の獅子舞をしていたから、『子ども獅子をするなら』と、西之組を復活させたんです。」（写真 6）



写真 6 西之組子ども獅子の担い手たちと網谷さん（野川信博さん蔵）

西之組の離脱は波紋を呼んだようだが、西之組は、自分たち独自の芸を守りたいという意思が強かったようである。西之組は、保存会を結成する前から、8 ミリフィルムで獅子舞の映像を撮りためていた。その映像をもとに西の技を復活させようとする努力も、後年なされていった。

また、1979 年に西之組が子ども獅子をはじめたのは、当時子どもの人口がとても多かったことを反映していると考えられる。1970 年代前半の「第二次ベビーブーム」期に生まれた子どもたちがこの頃の子供会のメンバーだった。

『天神町ひろば』には、「（前略）獅子舞の生き辞引ともいわれる網谷春吉さんに来て頂き、二百年に及ぶ伝統芸能の中で七十年前に使った事のある子供獅子を御指導して頂き」[野川 1980 年：1 頁] とある。網谷さんは当時 80 才代だったというから、網谷さんが子どもの頃に、子どもによる獅子舞が存在した可能性があるが、1979 年の「大蔵谷」においてそれは新しい試みだった。子どもが参加できるということで、組の地理的範囲の外や、新住民からの参加もあった。

また、西之組では部活顧問の縁で大蔵中学校ハンドボール部のメンバーを引き込んだ。NN さん（1967 年生）は次のように話した。「僕は小学 6 年生の時に獅子舞を初めてやって、もうこれでいいのかと思っていたら、中学でハンドボール部に入って、そこのコーチに（獅子舞に）ひっぱられた。中学 1 年ではだんじりをひき、中学 2 年からまた獅子舞に。」この時、大蔵中学校の女子生徒が、笛方を担当するようになった。西之組は、霊法会明石支部というむら社会外部の人たちや、子どもや女性の力を得て、獅子舞の組を復活させたのである。

こうしてこの時期、中之組と青年団が軸となった保存会と、子ども獅子を軸に再生した西之組が共存することになった。強いアイデンティティーを持ち、共に獅子舞を芸とする二つの組（中

之組と西之組）は、容易には混ざり合わなかったといえる。

大蔵谷の獅子舞は、1975年に明石市無形民俗文化財に指定され、1979年には兵庫県無形民俗文化財に指定された。これは、「保存会で、中之組と西之組がいっしょにやったときにもらった」と、保存会で獅子舞の指導に携わってきた IY さん（中之組、1926 年生）は言う。二つの組が一つの組として活動するなかで得た栄誉なのである。

### 3-3-5 濱之組の取り組み

濱之組が担ってきた囃口流しも、継承者不足に悩んでいた。濱之組は地理的な範囲が狭く人口が少ないうえ、囃口流しには獅子舞のような華やかさはなく、この時代の若者を魅了するのは難しかった。そこで、濱之組は、獅子舞を引退した年齢の人たちを積極的に勧誘するようになっていった。

濱之組をけん引してきた FA さんは、「濱之組だけでは無理です。それで、4つの組というより、大蔵町全体でやることにした」と言う。中之組と保存会で獅子舞に携わってきた IY さんは、「お前、獅子舞卒業したなら、濱之組応援してくれ」と言われ、囃口流しに参加した。他にも、獅子舞を終える頃に囃口流しに誘われた人は複数いる。

1975年、囃口流しは明石市無形民俗文化財に指定された。さらに、1986年には、神事保存会の名前で囃口流しのテキストが作成された。ここには、囃口とけやりの歌詞が記録されている。

FA さんによると、濱之組の囃口流しは「何べんも途絶えかけた」という。それでも歌詞をテキスト化したり、後年には三味線の譜面を作ったりすることで継承しやすいものにし、組の外からも人を引き込んで、乗り切ってきたのである。

### 3-3-6 東之組の取り組み

東之組は、小干益躬を祀る穂蓼八幡神社を守っており、布団太鼓を持っている。1981年には、子ども用の布団太鼓を新調した。この時、新住民を取り込もうと声をかけたという。IK さんは言う。

「ユニハイツ（1974年築）の住民も、布団太鼓に誘った時、『それはええこっちゃ。うちらは故郷に祭りがあったけど、うちらの子にもそういうもんがあった方がいい』と言ってね、全部で560万円集まりました。それで、新しい布団太鼓を作りました。でも、お母さんらに『お手伝いお願いします』とやっていると、だんだん大儀になって、それからお父さんらもだんだん…そうして離れていく。（子どもたちが）布団太鼓を国道でひっぱる。すると、マンションの上から子どもらが見ている。それを見ると、哀れに思います。『なんで、お母さんらがちょっとの手間で、子どもらが入れるのに』と。」

息子の IT さん（1970年生）によると、一時は途絶えていた稲爪神社における布団太鼓の巡行も、布団太鼓の新調を機に再開したようだ。小学生だった IT さんは、太鼓を叩く役をしたという。

1970年代～80年代は、稲爪神社をめぐるむら社会にとって、様々な出来事があった。まず、青年団とヤング大蔵という地域社会の協同と親睦を図る社会集団が結成された。それは行政主導のコミュニティーづくりと時期的に重なるが、それとは別系統の、「大蔵谷」のむら社会の内発的な動きであった。このように組織化の動きがあった一方で、いったんまとまったものが分裂す

る動きもおこった。神事保存会や、獅子舞保存会がそれである。この時期は、どの組も奉納芸の担い手の不足に悩み、外部社会の人や、子ども、女性、新住民の取り込みが試みられた。さらに、行政による「伝統芸能」顕彰の動きが起きたのもこの時期である。

#### 4 考察

本研究では、第二次世界大戦後から 1980 年代における稲爪神社をめぐるむら社会の活動とその変遷を記述した。この時期の日本の社会変動を「大蔵谷」はどのように受け止め、適応していたのだろうか。

戦後間もない頃の稲爪神社秋祭りの写真は、戦争から解放され、生活の再建に向かう人々の生き生きとした表情をうつしだしている。祭りの規模は今日に比べて大きく、稲爪神社の広い氏子地域から多くの人が集まっている。

1950 年代は、組の持ち回りで神輿と鳳輦を担いで巡行をしていた。また、秋祭りの宵宮では、西之組と中之組は獅子舞、濱之組は囃口流しを奉納した。東之組は、布団太鼓を出して神輿行列に参加した。この頃の組は地縁集団であった。「大蔵谷」には農家や漁家が多く、祭りの担い手に困ることはなかった。また、祭りの日には学校も休みになり、少々の粗相は大目に見てもらえた。この頃の秋祭りは荒々しく活気があったようだ。

1960 年代、日本は農業社会から産業社会へと変貌していき、高度経済成長期に入った。「大蔵谷」においても、むらの外に働きに出る人が増え、祭りの担い手が急激に減少した。そして、神輿も担げなければ、芸能の奉納も危ぶまれる状況になった。西之組の年配者たちだけで獅子舞を奉納したエピソードには、日本が産業社会化していく中で、むら社会が培い継承してきた大切なものが失われてしまう、自分たちの芸能を氏神に奉納できなくなってしまう、という焦りと寂しさが感じられる。それは、祭り継承の危機を意味するだけでなく、むら社会の危機を感じさせるできごとだったと言える。

このような事態に際し、「大蔵谷」ではいくつかの動きがほぼ同時に起きた。まず、明石市政 50 周年（1969 年）をきっかけとし、中之組と西之組が合併して獅子舞保存会が設立された。また、神事保存会が設立され、4 つの組が協力する体制がとられた。

さらに、1970～71 年頃、「盆踊りでもしよか」と、気軽に結成された青年団が、「獅子舞が途切れていた。神輿も担がれん。消防団もなり手がおらんかった」という状況を救い、むら社会に若い力を送り込んだ。また、ヤング大蔵が結成され、稲爪神社の神輿行列をはじめ、夜回りや清掃活動など「地域のため」に働いた。ヤング大蔵は組のライバル意識を越えてつながろうとする試みであり、この地域に新たに居住した「新住民」の取り込みをも意識したものだった。青年団とヤング大蔵は、むら社会のために協同し、それによって絆を深めるという特色をもっていた。それは、エンブリー（2021 年）が指摘した、日本のむら社会がもともと有していた仕組みに重なる。

同じ頃、明石市はコミュニティ元年（1975 年）を宣言し、生きがいのあるまちづくりをめざした【明石市史編さん委員会 1999 年】。明石市コミュニティ研究会の「みんなで考えるまちづくり」（1974 年）という文章では、「伝統と慣習で組み立てられた組織」から、「住民のすべてが自由に参加し、平等に発言でき、住民主体の合意に基づく自治活動（コミュニティ活動）」への変容が呼び掛けられている。そして、そのことによって、住んでいる町や市のよさを守り育て

ていく「市民」になる、としている〔明石市史編さん委員会 2001 年〕。

この文章では、むら社会の組織は、乗り越えられるべき前時代的なものと位置付けられている。確かにむら社会には新参者に対する閉鎖性がある。ヤング大蔵結成時に参加した新住民が離れてしまったのはその例だ。しかしその一方で、地域社会のために協同しよりよい社会を作るといふ、この文章における「市民」としての働きを、むらの社会集団は担ってきた。実際、むらの社会集団は、行政のコミュニティ作りにも深く関わっており、大蔵コミュニティセンター設立の発端となった中学校部活顧問問題でも多くの青年団員が活躍した。消防団にも、青年団員が多く含まれている。

また、むらの社会集団は、常に閉鎖的だったわけではなく、人手不足という現実に向き合い、集団の拡大に努めてきた。例えば、獅子舞保存会は青年団を取り込み、青年団は部活の顧問であることを利用して若者を集めた。保存会から脱退した西之組は、霊法会明石支部というむらの外部の人たちや、子どもたち、ハンドボール部の女子などを取り込んで西之組を再生させた。濱之組は、獅子舞を卒業する年齢の人たちを組の境界を越えて囃口流しに誘った。東之組は、子ども用の布団太鼓を新調し、マンションの新住民の取り込みを図った。このような動きの結果、もともとは地縁でつながってきた組が、地縁をベースとしつつも、むしろ結社縁のつながり（何らかの目的が縁となる集団。例えば獅子舞をするという目的が縁でつながる集団）へと変容していった。また、このような動きの中で、子どもや女性が祭祀や奉納芸に参加する道も拓かれた。このことは、「大蔵谷」のむら社会を開いていく重要な動きだったと考えられる。

一方で、中根千枝が指摘するように、日本の社会集団は、「場を共有する」人たちによる一体感が強く、「ウチの者」と「ヨソ者」の意識が明確にある〔中根 1967 年〕。この特徴も、「大蔵谷」には色濃く表れている。組の一時的な合併や再分裂は、「大蔵谷」のむら社会が、組への愛着を基礎にしており、むらのために必要なら組を越えて協力するが、不満があれば元の形に戻ること示している。それぞれの組はやはり別の社会集団であり、合併は困難なのである。そして組は互いにライバル意識を持っている。このライバル意識は、組だけではなく、例えば青年団とヤング大蔵など、この社会にしばしば現れる。ライバル意識は、時に対立を生むが、社会に活力を吹き込みもする。「大蔵谷」が内包するいくつものライバル関係は、この社会の動力源なのである。

このように、高度経済成長期の社会変動への「大蔵谷」の適応には、日本のむら社会の特色が表れている。それは「前時代的なもの」、というよりは、社会が有する特色として、そう簡単には変わらないものといえそうだ。

## 5 おわりに

1960 年代以降、日本社会が産業化し、むら社会が危機に瀕した時、「大蔵谷」では、組の枠を超えて協力し、奉納芸や神事の継承に努めた。また、青年団やヤング大蔵などの社会集団を結成し、むらのために協同し、親睦を深めた。さらに、地縁にもとづいた組を徐々に結社縁のつながりに変えていくことで、むら社会の閉鎖性を緩和していった。これらのことから、むら社会の危機を、「大蔵谷」の人々はむら社会のやり方で切り抜けてきたといえる。そしてその活動の核となるのは、稲爪神社であった。

時代や政治体制、産業構造、生活様式、景観が変わっても、「大蔵谷」では稲爪神社をめぐる

活動によって、むら社会が実体をもって現れてくる。かつてのようにむらが自明のものとしてあるわけではないが、それは確かに存在している。このことは、今日の日本の都市近郊の地域社会にある程度共通していると考えられる。

現代の「大蔵谷」のむら社会は、人々の実践によって形作られ、可視化される。そして、その中心には神がいるのである。

## 謝辞

本研究を実施するにあたり、大蔵谷の何人もの方々に多くを教えていただいた。一人一人お名前をあげることはしないが、本稿に登場しなかった人たちを含め、みなさんに心より感謝いたします。また、古い時代の文章の解釈については、中村健史氏（神戸学院大学人文学部）に助言をいただいた。なお、本研究は科学研究費の助成を得た研究「明石における「地域の自画像」の研究 ―通史の変遷をたどる―」（課題番号 19K12491、研究代表者 矢嶋巖）の一部である。

## 注

- 1) 「ムラ」とカタカナ表記されることもあるし、「村落共同体」と呼ばれることもある〔鳥越 1993 年〕。
- 2) 『兵庫県市町村合併史』上〔兵庫県総務部地方課 1962 年〕、および附図〔兵庫県総務部地方課 1962 年〕をもとに記述した。
- 3) 大蔵町 1 丁目～8 丁目は、1966 年と 1972 年の住居表示整備によって名称が変わった。大蔵町 8 丁目のごく一部が天文町 2 丁目になったという例外があるものの、大蔵町 1 丁目～8 丁目は、大蔵八幡町、大蔵町、大蔵中町、大蔵本町、大蔵天神町になった〔明石市史編さん委員会 2001 年〕。
- 4) 『采邑私記』では、稲爪神社という表記は誤りで、稲妻神社であるとしている。稲爪神社の名前の由来については諸説ある。
- 5) 聞き取りによると、これらの組には「飛び地」も存在するという。本稿ではあくまでも大枠を記した。
- 6) 秋月氏の先祖に大蔵谷に関係する人がいたという伝承がある〔石井・伊藤 2009 年〕。
- 7) 神輿を担ぐときは酒が入っていたという。祭りは、年に一度の無礼講で、酒も飲めて楽しかった、と、FA さんは語った。
- 8) 稲爪神社の縁起にちなんで、小千益躬に扮した人が牛に乗り、鬼刺しの矢を放つ仕草をしながら口上を述べる儀礼。
- 9) この経緯は『明石市史 現代編 I』にある。1968 年頃から中学校のクラブ活動を学校教育から外して社会教育に移行する方針が出され、教員が指導しなくてよいことになった。明石では指導者がいないためクラブ活動が減った。また、生徒だけでの活動は禁止されていた。こうした中、「クラブ活動の崩壊を防ぐには地域社会の力を借りるしかない」と、中学生だけでなく地域住民も一緒にスポーツができる、学校施設を利用したセンターを作る構想が生まれた。自治省が進めていた新しい近隣社会づくりと、明石市長がめざした大都市近郊の町づくりと、部活を社会教育に移行するにあたっての施設づくりと地域住民の要望が相まって、明石のコミュニティーセンターができた。その第一号が、1972 年設立の大蔵コミュニティーセンターであった〔明石市史編さん委員会 1999〕。

## 参考文献

- 明石市教育委員会（編）1985 年『明石市史資料（古代・中世篇）第 5 集』明石市教育委員会。  
 明石市史編さん委員会（編）1999 年『明石市史 現代編 I』明石市。  
 明石市史編さん委員会（編）2001 年『明石市史 現代編 I 資料・統計』明石市。  
 明石市役所（編）1940 年『昭和十五年版 明石市勢一斑（第貳拾壹回）』明石市市役所。

明石市役所（編） 1950 年『明石市勢年鑑 1950 年版』明石市市役所。  
明石市秘書課広報統計係（編） 1962 年『明石』明石市。  
明石市企画室（編） 1970 年『明石の人口 45 年国勢調査から』明石市。  
明石市総務部企画課（編） 1983 年『明石の人口 昭和 55 年 国勢調査結果報告書』明石市。  
明石市企画部企画課統計係（編） 1991 年『明石市統計書（平成 2 年版）』明石市。  
明石市総務部情報管理課統計係（編） 2001 年『明石市統計書（平成 12 年版）』明石市。  
明石市総務部情報管理課統計係（編） 2011 年『明石市統計書（平成 22 年版）』明石市。  
明石市総務局総務管理室情報管理課統計係（編） 2022 年『明石市統計書（令和 2 年版）』明石市。  
明石市立大蔵コミュニティセンター（編） 2002 年『創設 30 周年記念誌』大蔵コミュニティセンター。  
石井秀夫・伊藤久（編） 2009 年『秋月家から見た九州の歴史』シニアネット久留米デジタルアーカイブ研究会。  
上野千鶴子・電通ネットワーク研究会 1988 年『「女縁」が世の中を変える－脱専業主婦のネットワーク－』日本経済新聞社。  
上野千鶴子 1994 年『選べる縁・選べない縁』井上忠司・祖田修・福井勝義（編）『文化の地平線－人類学からの挑戦』世界思想社、136-153 頁。  
内山節 2010 年『共同体の基礎理論－自然と人間の基層から』農山漁村文化協会。  
エンブリー、ジョン・F.（田中一彦訳） 2021『須恵村－日本の村』農山漁村文化協会。  
鳥越皓之 1993 年『家と村の社会学 増補版』世界思想社。  
中根千枝 1967 年『タテ社会の人間関係－単一社会の理論』講談社。  
中牧弘允 2003 年『序論 現代日本の社縁文化』中牧弘允・セジウィック、ミッチェル、（編）『日本の組織－社縁文化とインフォーマル活動』東方出版、15-17 頁。  
中村健史 2020 年『「稲妻大明神縁起」と『予章記』』『人文学部紀要』40、189-198 頁。  
西川哲矢・中村健史 2022 年『采邑私記－翻刻と訓読』デザインエッグ株式会社。  
橋本海関 1974 年『明石名勝古事談』（復刻版）、中央印刷株式会社出版部。  
秦（村上）石田 1995 年『播州名所巡覧図絵』臨川書店。  
兵庫県総務部地方課（編） 1962 年『兵庫県市町村合併史』上巻、兵庫県。  
兵庫県総務部地方課（編） 1962 年『兵庫県市町村合併史』附図、兵庫県。  
米山俊直 1966 年『集団の生態』日本放送出版協会。  
米山俊直 1967 年『日本のむらの百年－その文化人類学的素描』日本放送出版協会。

## 参考資料

大蔵谷の囃口流し保存会 「明石市指定無形民俗文化財 大蔵谷の囃口流し」。  
野川順一 1980 年「子供獅子舞」『天神町子供会 ひろば』第 5 号、大蔵天神町子供会広報委員会、1 頁。  
兵庫県・公益財団法人兵庫県消防協会 「まちを守る情熱がある 地域の安全・安心を守る消防団」。  
藤谷誠一郎 1980 年「獅子舞西之組」『天神町子供会 ひろば』第 5 号、大蔵天神町子供会広報委員会、2-6 頁。